



普及指導の現場から

No.8

つぶ類漁業の実態調査と今後の取り組みについて

北海道水産林務部水産振興課（胆振地区水産技術普及指導所在勤）

主任普及指導員 稲村 明宏

はじめに

北海道胆振（いぶり）総合振興局管内におけるつぶ類の漁獲は太平洋海域を中心に行われていますが、漁業生産に占める割合が低いこともあり、資源や漁業の実態は殆ど把握されていない状況にあります。そこで、当方では北海道水産林務部の平成27年度研究情報普及推進事業で実態把握調査を実施し、この中で明らかとなった課題等と、今後の取り組みの可能性について紹介します。

1. 漁獲物調査

同管内で主に漁獲されているつぶ類の種類を把握するため、管内でつぶ類の漁獲量が最も多いA漁協の協力を得て種の同定を行いました。その結果、現地の呼称で「マツブ」は標準和名が「エゾボラモドキ」、小型のものは一部「ウスデエゾボラモドキ」でした。以下同様に「バイツブ（ドロツブ）」が「クシロエゾバイ」、 「マキツブ」が「オオカラフトバイ」、 「毛ツブ」が「アヤボラ」、 「磯ツブ」が「エゾバイ」、 「ツブ」が「アツエゾ

ボラ」であることが判明しました（表1）。

2. 操業状況調査

操業実態を把握するため、A漁協の漁業者数名から、つぶ籠漁業及び他漁業でのつぶ類の漁獲状況等について聞き取りを行いました。その結果、つぶ類の漁獲はつぶ籠漁業が最も多く、近年はアヤボラ（写真1）の単価上昇に伴い漁獲金額も増大したことから、同漁協におけるつぶ籠漁業の位置づけがこれまでに比べ向上していることや、漁場の移動等、過去からの変遷が把握できました。

3. つぶ類漁獲状況の推移

A漁協のつぶ籠漁業におけるつぶ類の種別漁獲量は、平成16年以降アヤボラが最も多くなっています。アヤボラの漁獲量は平成26年からは急激に増加し、平成27年には569トンに達しました（図1）。また、漁獲金額も同様に増加し、平成27年には61,000千円に達しました。一方で、この間の他のつぶ類の漁獲量に大きな変動はありませんでした。

呼称	マツブ	バイツブ (ドロツブ)	マキツブ	毛ツブ	磯ツブ	ツブ
種名	エゾボラモドキ (マツブ小の一部: ウスデエゾボラ モドキ)	クシロエゾバイ	オオカラフトバイ	アヤボラ	エゾバイ	アツエゾボラ

表1 A漁協で漁獲されているつぶ類

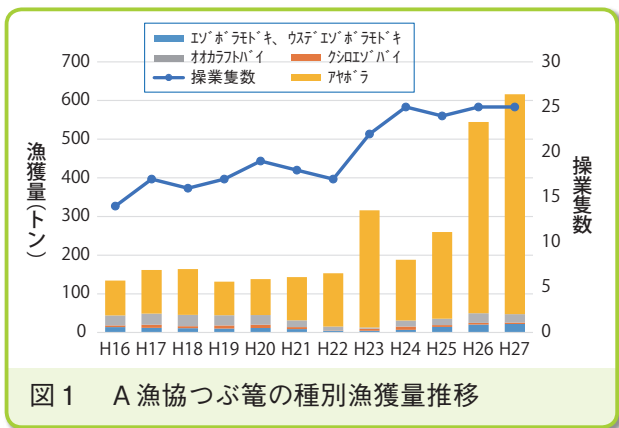


図1 A漁協つぶ籠の種別漁獲量推移

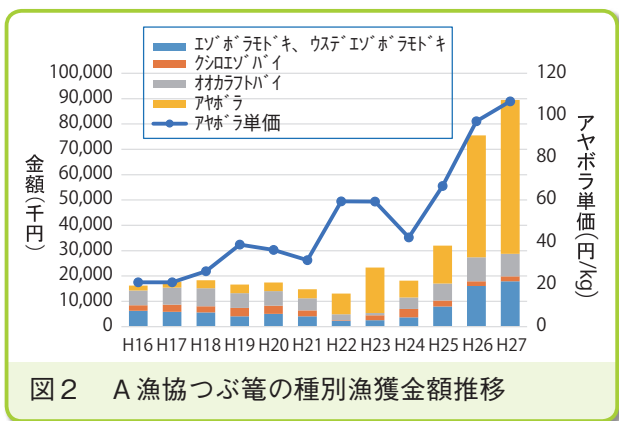


図2 A漁協つぶ籠の種別漁獲金額推移

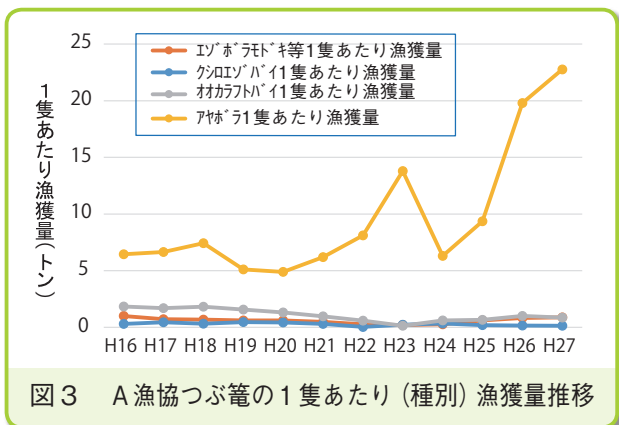


図3 A漁協つぶ籠の1隻あたり(種別)漁獲量推移

また、つぶ籠の操業隻数は、平成16年以降14～19隻で推移し、平成23年以降は22～25隻に増加していることが分かりました。

種別の単価はいずれの種も、平成16年以降10年間で上昇傾向にあり、特にアヤボラは平成16年の21円/kgから平成27年には107円/kgと約5倍に上昇しました(図1・2)。アヤボラの単価の上昇要因としては、サザエの代用として缶詰加工向けの需要が



写真1 近年、漁獲量が急増しているアヤボラ

増加したことがあげられています。

また、つぶ籠漁船1隻あたりのアヤボラ漁獲量は、平成16年以降5～10トンの間で推移していましたが、操業隻数が増加しているにもかかわらず、平成26年から急激に増加し、平成27年には22.8トンに達しま

した。他のつぶ類については、年1トン/隻前後で推移し大きな変動はない状況でした(図3)。

4. 今後の取り組みについて

このように北海道胆振総合振興局管内におけるつぶ類の漁獲は、近年アヤボラの単価上昇の影響を受け、漁獲量が急激に増加している状況にあります。漁業者にとって漁獲量、漁獲金額が増えることは何よりですが、このままの状況が続いた場合には、将来的に資源の減少が危惧されます。つぶ類の場合、一度資源が減少すると、資源管理等の措置を講じたとしても回復するまでに相当の年月を要することが一般的です。

漁獲統計資料をみると、同管内ではA漁協の他にもアヤボラ主体の漁獲を行っている漁協が複数あり、同様の状況であると推測されます。

このような状況を考慮すると、アヤボラ資源の持続的な利用に向けた方策を関係漁協と検討していく必要があると考えています。